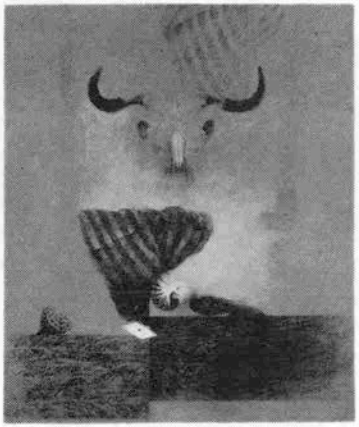
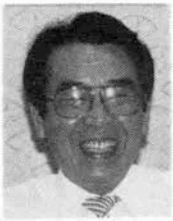
随想



<夢魔シリーズ（翳）高田節子>

おちこぼれ金魚

楠本　喬章<笑クリエイト社代表>



娘が学生の頃、バザーで売れ残ったといって持ち帰った金魚七尾が、二年たったいまも健在で、水槽の中を遊泳している。

ビニール袋に入れられ、連れ帰えられた時は、まず一週間はもたないだろうと家族の誰もが思うほど衰弱していたのだが、当家の水に合ったのか、七尾ともに生き延びている。

金魚飼育のベテランに聞くと、どうやら種類はコメットと和金の混成隊らしい。金魚の中でも比較的に頑健で飼育し易い種類だとのことである

ことしの二月。厳寒の深夜谷川のせせらぎに似た音に目を覚ました。何だろうと不審に思い、音の出どころを探ってみると、どうも水槽を置いたあたりからである。点灯して驚いた。下駄箱の上に置いた水槽のガラスが無惨にも割れて、中の水が流出してしまっている。水槽の小砂利の上でパクパクと眼をむいているのが二尾。あとの五尾は、流出の勢いで地上に叩きつけられ玄関のタイルの目地の上でピクリとも動かない。

慌ててポリバケツに水をはり仮死状態の連中を静かに入れた。地上に流出した五尾は依然として白い腹を見せて浮んだままである。

五分ほど経った。いちばん図体の大きいのが横泳ぎしだした。続いて残りの四尾も…

…と言いたいが、一尾だけは仮死状態である。

この一尾は、当家にもらわれて来てからずっと気になるヤツであった。他の連中はスクスク育って行動も素早いのに、生まれつき脆弱で発育が悪く、冴えない肌色？のうえに、他の金魚に比して極端に眼が小さい。常に呼吸困難なのか水面でプカプカやっている。ある朝、家人が水槽を覗き込むと、この発育不全がプカリと腹を見せて浮んでいた

「アッ！死んでる!!」

素頓狂な声を出し指先でトンッと突いてみると、緩慢な動きでユラリと泳いだという。体力がないので無気力なのか、生来のおどけものなのか。とに角、気になる彼奴であった。

その、気になる金魚が、今まさに厳冬の冷気にさらされたうえに地上死のフチをさまよっている。ほかの六尾が蘇生したのに……と思うと一入憐れさがこみ上げてきた。

数十分ののち祈るよう気持が通じたのか、やがて気になるヤツの尻尾が、かすかに動いたかと思うと例の緩慢な動きで泳ぎだした。

ホッとした安堵感の中で、小さな生命にさえ宿命に似たものがあるような気がした。

今日も彼奴は、活発な他の金魚の動きから孤立しながら、漸く生きている。

押絵はいま曼荼羅

小西　松甫〈みやび流押絵三代目〉

「次の停車駅は名古屋……名古屋……」今日は新幹線で東京教室へ出かける日。いつも時間に追われっ放しの私にとって、この3時間ほどリッチな時はありません。ウォークマンを聴きながらコーヒーを飲み、愛読書片手に作品の構想をねる……（時には寝る。）こういう時こそ冴えたひらめきに出逢えるようです。

去年のこの日、突然それは訪れました。

「山へどうぞお遊びに…。」御懇意にしていただいている、空海の真筆研究家、宇佐美公有師のお言葉を思い出し、主人と共に高野山へお参りしたのが2年前。そこで目にしたものは、江戸時代から伝わる極彩色で描かれた、金剛の胎蔵の両部曼荼羅の素晴しさでした。

母の二代目家元小西絹甫は先代から流れる優雅な伝統美を追求し、現在のみやび流を支えていますが、私は何か違う角度からみやび流の味が出せないものかと、20年以上も「円」をテーマに制作してきました。その私にとてつもない主人のひと言、「押絵で曼荼羅を創ったら？」な、な、何と!!御案内の宇佐美師までが「きっとお創りになれます」。曼荼羅こそが究極のテーマと思い初めていた私は、「何とかやってみよう……。」

しかし実際のところ、900近い仏を押絵で創るなど、一生かかってもできることではありません。それからは寝ても覚めても曼荼羅のことばかり。そして記念すべき去年の春の新幹線車中。「そうだ!!梵字で仏の姿を表わした種子（しゅじ）曼荼羅なら実現できるかもしれない。」

これからが大変。高野山へ何度も足を運び梵字を勉強し始め、愛読書もフォーカスが密教の本にかわりました。そしてきっかけを与えてくれた主人までが、すっかり密教のとりこになってしまったのです。クリスチャンホームに生まれた主人ですが、仏教だけでなくあらゆる神々を包みこみ、宇宙との一体化において永遠の命を感じさせる曼荼羅・密教の世界に魅かれるのも当然のことでしょう。

押絵史上初め、しかも末代に残る400号の押絵曼荼羅。折しも今年は創流100年で初代絹甫の17回忌。来春一般公開の後、高野山へ御奉納の話もまとまり、今はこの大作に取り

組めた御縁と多勢の会員の心暖まるお力添えに感謝しつつ制作に没頭する毎日です。

「間もなく終点、東京…」さあ、髪を整え、お化粧を直して、皆さんが待つ教室へ行って来まーす。

ファッションはドラマ

米谷　玲子〈神戸服装専門学校長〉

「人生はドラマである」また「ファッションもドラマである」と思えるこの頃です。

季節の移りかわりとともに過ぎて行く人生劇の影となり形となっていつも見えかくれにその人を物語るのもファッションだと思います。

街の中で「ハッ」とさせられる装いの人と出逢えたとき一瞬楽しい気分を味わっている自分に気付きます。一見リッチ風、自立している女性風また自由気まま風、とそれぞれが見事な個性を見せ、ちらりとドラマの顔をのぞかせて目の前を過ぎ去って行きます

最近世界の流行も数人の日本人デザイナーなしでは始まらないとさえ云われる程に、日本のファッションも成長し注目を浴びていますが、ヨーロッパ人の目から見て「ハッ」とするような感動は、未知の東洋のドラマの顔が作品に秘められているからではないでしょうか——。日本人の感受性のルーツであるワビとサビが、「自然」「人間」「心」の思想としてファッションが物語られているからだと思います。日本人が既に忘れかけ失いかけているものをデザイナーによってファッションによみがえらせている傾向は、シーズン毎に私自身も最大の期待を持って眺めています。彼等の作品がいつまでも自然と人間と心を大切にしたドラマティックな作品であってほしいと願っています。

過日私の学校（神戸服装専門学校）の創立四十周年記念式典と祝賀会を神戸ポートピアホテル「偕楽の間」で催しましたが、祝賀記念作品として私のコレクションを十点ばかりご披露しました。セレモニーを意識した作品の中に、神戸っ子の遊び心で楽しむ作品をと思って一点光ファイバーを織り込んだドレスを発表してみましたが、それがミニ話題としていくつかの新聞紙上にとりあげられました。

光ファイバーを四千二百本スパンコールに縫い込んだ新人類が楽しむドレス、お値段はちなみに60万円という記事でしたが、このドレスについて新人類より一番楽しんだのは私自身であったかも知れません。ハイテク、ハイタッチのフュージョンの輝きを始めてスイッチ・オンで眺めたときの喜びは、ちょうど子供心にかえったような嬉しさ一杯とも云えるものでした。

この夏の終り近く三度目のニューヨークの旅へ。FITの研修もさることながら、私にとってソーホを気ままに見て廻ることが一番の楽しみにしています。いつか、ファションのドラマから離れたボヘミアン的遊び心の旅をしてみたいと夢みています。

創立40周年記念式典（顔写真は筆者）

■エッセイ

子供の絵本考

えと文
岡田嘉夫

昔々、私が幼い頃

「大きなったら兵隊さんになるねん」

と、いう友達をしりめにして

「大きなって兵隊さんになるのんいやや！」

と、母の胸の中でオンオン泣いた記憶がある。それは、母に別れるとか、命が惜しいとか、戦争に反発してといったむつかしいものでない。ある時、母に手をひかれて町の中を歩いていた時、陸軍の兵隊の一団とすれちがった。当時としてはまことに失礼でオソロシイ事だが「コジキの一団」として見えた。ほこりと汗のたまらない匂い、きたならしいババ色の服、足のクサイ匂いをひざまで封じこめたゲートル、カバのようなブサイクな靴、それらがダッダッダッと単調な音と、びんぼう臭さ・みじめさを引きずるようにして通り過ぎていった。何一つあこがれるものはなく子供心にたまらなくクラーく悲しいかたまりのようなものだけをぶちこんでいった。

「死んでも兵隊にはなれへん！いやや！」

私のびんぼう臭さ・みじめったらしさ嫌いはすべてここに発生した。当然のように、すでにチャップリン・ドジョウすくいのあのゲビた踊りも大嫌いだった。これらは大きくなっても全く変わらなかった。

たまたま私が幼い時に終戦になったので兵隊にいかなくてよかった。もし、戦いが続いていれば兵役逃れで、六甲の山中へでも逃げこんであげくのはては銃殺と……。

「それが子供の絵本考に何んの関係があるねん」

と、思われるが私にはおおアリで今回の子供の絵本・岡田嘉夫のアンデルセンシリーズ全五冊も、あのびんぼう話のクイーンである「マッチ売りの少女」を外した。編集者は、

「そんな無茶な、それが一番良く売れるメダマで

す！」

ところが私の性分がびんぼう臭をニクムのでしかたない。

「嫌いなテーマで画を描いてもロクなもんがでけへん――」。

と、「人魚姫」・「みにくいアヒルの子」・「おやゆび姫」・「白鳥の王子」・「ナイチンゲール」すべて可愛らしく華麗で、こぎれいで、悲しさにも必ず美しいロマンがあって……一切びんぼう臭のないものばかりを決定。まことにドクダン的な絵カキである。

「子供は小さい時からびんぼう臭い事や、わびしい事は知らんでよろしい。大人になったらいやでも夢やぶれエライ目にあい、びんぼう、わびしい事、山ほど体験せんならん。せいぜい六、七十年の短い一生、なんで子供の時から本でまで悲しい事やびんぼうの事をあわてて知ってメンエキをつけんならん、ムクな美しい夢はいつ見たらよろしいのん。」

こういう考えで私は絵本を描いている。

私の知りあいで、小さな時からびんぼうで、苦労のしっぱなしで大人になり、コツコツ小金をためて事業をおこし、やっとで成功して、シャンデリアのある応接間をそなえた自宅を建ててやれやれと数年のんびりしただけで、急に事業が左前になって、あっけなく首を吊って自殺した人を知っている。この人にとってびんぼうのメンエキは全くきかなかったのである。びんぼうや悲しさのメンエキは天然痘のメンエキと違うのだ。

だから子供に、びんぼうには強く、びんぼう人にはやさしく、悲しみには強く……そしてベンキョウ……等々、通りいっぺんのメンエキ工作や教育にいそしんでいるお父さんお母さんに知ってほしいのは、私のように「兵隊さんが嫌いだ」というとんでもないカクから自我らしいもの、個性らしいものが芽ぶき、やがてそれなりの絵カキになった子供もいるのだ。私だけが決して特殊な例でない。

子供は皆な、いつかどこかで、偶然に、必然的に必ず自分を発見し、私のように声を出してオンオン泣いたり、ある子はうれしくって飛び上ったり、ある子は目をギンギンにかがやせたりしているのです。どうか、その時その瞬間には両親のどちらかがいてやってそれを大切に育ててやってほしいものだ。決して通りいっぺんの頭で接しないで……。

同じように絵本の絵も必ず主義・主張がある。どうでもよいようなありふれた絵のものは子供に買いあたえる必要はない。図書館でまとめて借りることです。その主義・主張のはっきりした絵の絵本をまず何冊も子供に見せて選ばせる事です。それらの絵には必ず子供も「好き！」「嫌い！」の答をてきぱき出します。どうでもよいもう一方の絵本には子供のかえってくる答の間は長いものです。これが子供の絵本を選ぶ一つの方法です。私の絵本も、きっと「好き！」とイッパツでいってくれる子供が多いとオモウ！

〈筆者紹介〉
昭和9年、神戸に生まれる。中西勝、岩田専太郎氏に師事し、48年、講談社出版文化賞受賞。以後銀座三越、松屋等で次々と個展。49年より3年半にわたる週刊朝日連載「新源氏物語」の挿画で好評を博す。『岡田嘉夫源氏絵巻』『女絵草紙』がある。日野市在住。

●こうべ味な旅㉕

一月十九日夜半

安達瞳子〈安達流主宰〉

ばたんっ。

あっと思う間にドアが閉り、私は廊下にぽつんと立つはめになった。鍵は部屋の中。ノブを廻しても戸板をさすっても、自動ロックだからどうにもならない。今春一月十九日、神戸ポートピアホテルへ泊まった晩だ。十時頃だったと思う。

身に着けているのはパジャマ。水色のガウンをひっかけてはいるものの、湯上りの素足に素顔だ。この姿でフロントへ降りて行けば、夢遊病者か色魔の疑いをかけられるに違いない。

お風呂から上ってひと休みしたその晩、私は、少しお腹が空いていることに気が付いた。ルームサービスをとるというほどでもなく、テーブルに盛られた支配人からのサービスの果物を食べることにした。苺三個、バナナ一本、林檎半分……。黙黙と頬張った後、このままにして寝ると夜中に芳香が気になるだろうと、皮を載せた皿に紙ナフキンをかけ、恰好が恰好だからちょっと人目を避けてドアから身体を半分出して廊下へ置こうとした。その時、ふわりナフキンが舞い、拾おうとした瞬間、重くて厚いドアがぐいと私を押し出し、そのまま閉じてしまったのだ。

あたりは静まり返っている。隣室をノックするわけにも行かず、勇気を出してエレベーターまで歩いた。まだ着いたり帰ったりする客があるだろう、優しそうな人だったら、恥をしのんで訳を話し、フロントへの通報を依頼しようと覚悟を決めたからだ。

やがてドアが開いて若い男女が降りて来た。いかにも清潔なカップルだった。私は夢中で駈け寄った。

「解りました。僕、部屋からフロントへ電話しましょう、よくあることですよ……」

快く引き受けてくれた青年は、すぐ戻って来た。ボーイさんが合鍵を持って来てくれるまでの間、ずいぶん長い時間に感じられたが、二人は、身を縮める私の左右に立って

「僕、高校の教師です。責任持ちますから」

「わたしたち新婚旅行なんです。式、神戸で挙げて、帰ったら神戸に住むんですけど、これもいい思い出になります……」

などと、優しくガードしたり励ましたりしてくれた。しかも、やっと部屋が開いた時、礼状を書きたいのでと尋ねる私に

「当然のことですから……」

と名も告げない爽やかさ。神戸には何と気持の良い若人がいることかと、二人の後姿を見送っていると、美しい新婦が振り返って

「お花の、安達さんですね……」

と悪戯っぽく微笑むので、私はまた慌ててしま

った。

神戸に花の教室を持つことを、長い間私は願っていたが、右も左も解らずもたもたしていた。そんな二年ほど前、柏井紙業社長・柏井健一氏のご厚情で、凪月堂社長・下村光治氏を会長に、今津成生氏・田中教義氏・鳥越哲氏・島田光夫氏を副会長に、多くの方々のお力ぞえで後援会をつくっていただいた。

先の「事件」の晩は、そのための発足新年宴会開催にそなえて前夜入りした時だったのだ。そして念願の教室は、今春の四月、ゴーフルポートピア88ではソレイユの間で毎週木曜日に、三宮の神戸朝日カルチャーセンターでは第一・三の土曜日にと、それぞれスタートした。

そんなわけで、昨年来しばしば神戸へ伺うようになり、その度にいろいろな所へ連れて行っていただく幸な時を持つようになった。

その集いの名誉会長をご依頼している柏井社長は、私の知る限り最高級の食いしん坊で、のっけから「駒亭」や「藤はら」へ案内され、私の最も好きな新しい魚をカウンターで賞味する歓びを満喫させていただいた。主の熱心な研究心に感嘆した「馳走」も楽しかった。そして次第に、柏井社長が捜して居られるものが、新しい魚の醍醐味であることもさることながら、人の心の奥の奥まで思いやった測隠の情であることを感じるようにもなった。

土産に持ち帰るお菓子は「凪月堂」の〝ゴーフル〟と〝源氏の由可里〟。ゴーフルは、育ち盛りの少女期、何よりのおやつとしてよくいただいた懐かしい味が忘れられないからだ。材料の無い時代、砂糖と棉実油だけであの工夫をされた創立者には、改めて敬服してしまう。〝源氏の由可里〟は、「源氏物語」をテーマに先代夫人吉川冬季子相談役が十八年の歳月をかけて意匠、職人さんたちが精進を重ねて作りあげた二百六点の和菓子で〝野分〟〝歎〟〝閃光〟〝灰かぐら〟など月がわりで三、四点づつ並んでいる。めでたいことばかり続く物語ではなく、涙も深いこの文学を、きれい事の装飾菓子でなく、雅に、かつ、本当に美味しく完成させる陰のご苦心いかばかりと思われ、数々の賞を受賞して居られると聞くが、県外に告げたくなってしまうのだ。

こうした創造性の、しかも、これ見よがしな我や押しつけの感じられない測陰の情が、私が神戸に心ひかれて来た源であるように思う。むろんまだ、百余年の間に培われた天然の良港の、日本最大の対外貿易港を築いて来られた歴史の重みの一端にも触れ得てはいまいけれど、海を媒体とした自然と人間との連帯が、いつの間にか生活観の根となって、人と人との独自のコミュニティを育んでいるように私には感じられるのだ。そうでなくては、神戸の今日の緑豊かな都市づくりと発達はないだろう。

あの晩のカップルの爽やかさも、神戸ならではだったのだ。二人のお名前を教えてくださる方は居られないだろうか。

〈筆者紹介〉
昭和11年、父・安達潮花（安達式挿花家元）、母・武子の娘として誕生。成城学園から学習院へ卒業と同時に流派後継者として活動に専念同43年独立「安達瞳子制作室」設立、同56年春、生家安達式挿花を〈花芸安達流〉とし統合する。

kobe音楽夜話

〈17〉

今宵はオペラでもいかが？

中村 健〈オペラ指揮者〉

Bürgermeisterstück（市長さん用！）と称する牛肉の部分がある。これは霜降りに近い部分で我らが神戸肉に比ぶべくもないが、なかなか美味である。ドイツですき焼となると、それをなじみの肉屋のオバさんに薄く切らせることから始まる。ドイツ料理に、肉をそんなに薄く切るものはないので、厚くならないように目を光らせる。

「ハムのように切ればいいのネ」

「否、紙のように」

次の客であるこれも顔なじみの最近定年になったばかりのオジさんは、切られていく肉とボクの方を交互にチラチラ見ながら、文句も言わず待っていてくれる。全くドイツ人はこんな時お行儀がいい。すると思い出したようにオバさんが肉を切る手を休め、

「きのうの『魔笛』よかったわよ」

昨夜の『魔笛』を指揮したあと、外ですれ違いざま「ブラボー」と言ってくれた、正装のエレガントなオバさんと、今、眼の前で肉を切っている人なつっこい白い制服姿のオバさんの姿が一致してくる。オジさんの眼がキラリと光る。

「やっぱりお前がきのうの指揮者か。そうじゃないかと思っていた。『魔笛』は六、七年ぶりだったけれど、とっても素晴しかった」

「タミーノはモーツアルト初めてかしら？」

「いやあの若いのは気に入った。彼は見込があるぞ、それよりあの演出はいただけないね」

「パパゲーノが猫、夜の女王が蛇と言うのは悪くないわよ」

「そして三人の童子が猿、モノスタトスが狼、これじゃ動物園じゃないか」

「そうよ、それが魔笛に踊らされるわけ！」

「成程。ところで君のフィナーレのテンポはちょっと速すぎやしないかい」

「若い指揮者だもの、その位でいいのよ」

「もっともあの演出じゃ、ゆっくりとしたテンポじゃあわないな」

「パミーナのアリアは泣けたわよ」

「それにレシタティブも自然だったし、オーケストラのバランスもよかった」

「歌手もこの人が振るとのるらしいわよ」

「しかしそれにしても、日本人がどうしてヨーロッパの音楽をやろうと思ったんだい？」

「ボクに銀行員は向いてないもの」

カラヤンやベルリンフィルの中に、ドイツ音楽

界の凄さを見ることは勿論できるが、真の凄さはむしろ聴衆側にある。人口五万の街の人々が、オペラハウス（劇場）を維持し、（建物だけじゃなく、歌手、オーケストラ、バレー、指揮者、演出家、ありとあらゆる裏方など何百人もの人間を公務員として雇い）自分達の劇場を楽しみ、それを井戸端会議の話題にする。これは凄いことで、これが政治形態が変わっても、幾世紀も続いているという。「聴衆のレヴェルが高い」と言うわけではない。レヴェルの高いのはむしろ日本の聴衆で、知識も豊富で、高度な批評をする。「底辺が広い」という言葉もぴったりしない。楽器を習う子供達の数や、レコードの売上は到底日本に及ばない。彼らにはあるのは「劇場を支えているのは我々、我々が主役」と言う意識らしい。劇場が彼らの生活の一部になっている。テレビでどんなすばらしいオペラ中継があろうと街の劇場の観客数にまず影響しない。生の舞台を彼らは愛している。もっとも大きなサッカーの試合のある日は気をつけなきゃいけないが…。

オペラを指揮する筆者

思いがけず肉屋の店先で昨日の公演をほめられたりすると、何とも気分がいい。クリーニング屋で、赤信号で、郵便局で、ビヤホールで、こんな事はよくある。彼らにとってはボクは、彼らの街の劇場の唯一の日本人指揮者だから、こちらは大変。誰が誰だかわからなくなる。ましてや彼らは劇場での格好と同じ姿で街を歩いてはいない。妙なことはできない。でも街で公演の反応を直接感じられると、いかに彼らが劇場を愛しているかがわかり、本当にうれしくなる。どんなエライ人の言葉や新聞批評より大事にしたくなる。

「この人に銀行員は無理よ」

この間、オバさんの Bürgermeisterstück を切る手は、悲しいことにずっと止まったままであった。

中村　健（なかむらけん）　神戸生れ。県立神戸高校、東京芸術大学、同大学院を経て昭和五十二年渡独。オスナブリュック市立劇場、ホーフ市立劇場と契約。今年八月からは、テトモルト市にある州立オペラハウスの指揮者として契約を結んでいる。この肉屋での話は、ホーフ市でのこと。

実験交流サロン

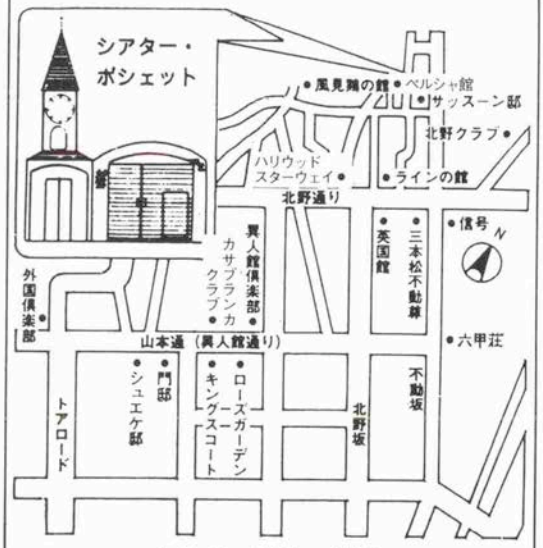
シアター・ポシェット

9月の公演

7日(日)　北浦洋子
後援会発足記念コンサート（無料）

20日（土）
21日（日）　シアターファントマ
“ステージストラック”

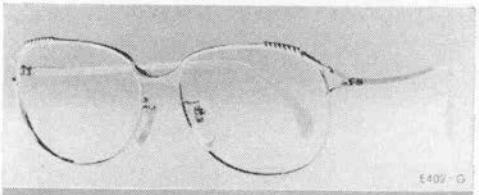
27日（土）
28日（日）　劇団神戸公演
“動機”他



★シアター利用のご案内

●曜日、時間／土、日曜日（通常）A.M.10：00—P.M.8：00
●費用／ホール設備の使用無料。光熱、空調、管理費のみ実費
●付帯設備／グランドピアノ・エレクトーン・録音、音響機器、ミキサー、照明コントローラー・テープレコーダー、マイク、映写機等
●お申し込み、お問い合わせ
そごう前センター街東南角、さんちか入口
〒650　神戸市中央区三宮町1丁目5—1　住友銀行ビル6F
佐本小児歯科　佐本　進　☎ 331—6302～3

The Sign of Elégance



女の引力でしょうか

'86
Elegance Boutique Autumn

神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目　☎(321)1212代表
三宮店・さんちかローザアベニュー☎(391)1874～5

地域文化論

〈その81〉

巨匠前川国男逝去
最近の美術館建築に至る思いは募る

嶋田　勝次〈神戸大学建築学科助教授〉

この六月、旅先で前川国男先生死去の報に接した。一昨年晩秋村野藤吾先生が他界されたのにつづく訃報で日本の建築界の両巨匠落ち、時代が変って行く感が深くなっているが、まだまだこのお二人の足跡をどう受け継いで行くかに追われる現在ではないかと思う。

村野先生は感性に根ざした建築家として、たえず新しいデザインの建築を生み出して、みずみずしい空間感覚で我々を魅了してこられた。それに対してこの前川先生の歩まれた建築の実績は、いつも日本の近代建築の水準向上を築いてこられたので、日本の建築界全体の恩師といっても過言ではなかろう。丹下健三の直接の師であっただけではない。次々提案され創られて来る多くの具体的な作品から、みんなはどれだけ多くのものを学んだであろうか。

先生の建築作品の中に実現されている透徹した論理は、材料・構造から意匠まで筋が通っている。我々はその先生の実績をどこまで消化して来ているだろうか。

戦後直ぐの木造建築プレファブ化のこころみから、昭和二十年代から三十年代はじめの神奈川県立音楽堂・図書館、そして日本相互銀行建築における技術的構法と造形性の追求に見られるテクニカルアプローチの展開、それから三十年代後半の福島教育会館・晴海高層アパート・京都会館・東京文化会館などにおける打放しコンクリートの可能性の追求は、建築に素材による力強さの表現を定着して来た。四十年代はコンクリートからプレキャストコンクリートへ。そこからレンガタイルへと、材料の扱いの変貌と共に建築の表情にやわらかさややさしさが現われ、それが時代のこころをつくられて来ているが、最近各地につくられた美術館に更にみごとに具体化されて来ている。

仙台の宮城県立美術館玄関アプローチ

昭和四十年代後半から五十年代の前川事務所の作品には、目白押しの美術館群の実現がある。

四十六年の埼玉県立博物館・五十年の東京都美術館・五十一年の弘前市立博物館・五十二年の熊本市立博物館・五十三年の山梨県立美術館・五十四年の国立西洋美術館増築・五十五年の福岡市立美術館・五十六年の宮城県立美術館等であるが、それぞれ各都市の地域文化の核となっている。

弘前と山梨以外は、いずれも機会があって拝見しているが、現場打込みタイルまたはタイル打込みプレキャストパネル構法を採用して、建築の外観に新しい表現を確立している。赤茶色またはクリーム系統の色彩と深い目地のタイルは、建築をどっしりとおちついたものにしているが、建築空間と外部環境のたくみな組み合わせや交流から豊かなアプローチの計画から、更にディテールのゆきとどいた配慮まで、建築家にとってはピリピリした神経を感ずるのである。

昨今のポストモダニズムといわれる表面的な建築ではなく、近代建築をつくりあげて来た底流をふまえ、その風土に根をおろした姿を、我々は前川先生の一連の作品から見出すのである。

各美術館の展示品の鑑賞だけではなく、無言ながらひびく建築をもっとゆっくり味わいたいと、訃報に接して思いはつのるのである

界隈性のあるウォーターフロント再開発を

■出席者（敬称略・順不同）

浜野　安宏　㈱浜野商品研究所代表取締役所長〉
スコット・ディッチ　〈米国デベロッパー・ラウス社最高顧問〉
鬼塚　喜八郎　〈㈱アシックス代表取締役社長〉
吉野　邦彦　〈㈱東急ハンズ営業開発部長〉
梅澤　忠雄　〈㈱UG都市設計代表取締役社長〉

――7月18日（金）、社団法人神戸青年会議所主催による「サマーフォーラムインKOBE'86」が開催された。その中の第4分科会で「世界のウォーターフロントに学ぶ」と題し、港街神戸のウォーターフロントの再開発について、5人のゲストによる公開討論会が行なわれた。（この記事は編集上の都合により再構成させてもらいました。〈編集部〉）

人の集まるウォーターフロント界隈を…

浜野　海と山に狭まれたこの神戸の街は、昔から国際貿易都市として栄えてきました。しかし今、21世紀へ向けて都市の開発、街づくりというものをひとつの転換期として見直してみる必要があるでしょう。

そこで現在、水際（ウォーターフロント）の再開発というものが注目されてきました。

今まで私たちは、水というものに対して背を向けてきたように思います。電力をつくるための手段として、飲料水として、そういった、人が生活する一手段として、水というものを捉えてきました。水に対してもっと、遊びの感覚をとり入れた捉え方をしていってもいいのではないでしょうか。

神戸の場合、街づくりという面で、母体となっているのが、北野町だと思うのです。ローズガーデン、キングスコート、異人館倶楽部といった小型の楽しいショッピングモールが若い人達の手でどんどんつくられていっています。今後は、海岸沿いの旧市街地、旧居留地といっ

たウォーターフロントを、我々の手で再開発していくことが、都市の活性化という意味での課題となるでしょう。ただ、旧居留地というのは土地価が高いので、若い人達が先行してやっていくのにも無理があり、やはり行政との絡みによる開発ということになると思います。

梅澤 現在、神戸市は、西神地区を主体に新しい住宅地、商業地、工業地などの開発が盛んに進められています。また、海にむかっても、六甲アイランド、メリケンパークと、次々と拡充整備されていっています。

神戸が今後より世界的な国際港湾都市として、拡大発展していくにおいて、ウォーターフロントがどういう位置づけとなるか。そして、ウォーターフロントの再開発を神戸のどの場所でどのように手掛けていけばよいかということを、これから考えていかねばならないでしょう。

梅澤忠雄

吉野邦彦

鬼塚喜八郎

スコット・ディッチ

浜野安宏

鬼塚 神戸はかつて、鉄鋼・造船の町、港の町として栄えてきました。そして昭和48年に、重工業にかわる新しい地場産業をということで、神戸市はファッション都市宣言をし、ポートアイランドにファッションタウンをつくったのです。これは、アパレルの街というのではなく、新しいライフスタイルをトータルに捉えた、衣食住に関連する産業の街といえるでしょう。

活性化の一つとして、この街をただ単にファッション産業が息づく街だけでなく、各企業が、その敷地の一部を半公共の土地として提供し、ゆとりある緑地帯を設け、また同時にグランドレベルを開放して、ショールーム、レストラン、カフェテリア、文化教室など一般の人が楽しめる、界隈性のある街づくりが出来ればと思います。

現在、ポートアイランドは島でありながら、訪れる人があまり水に親しむことができない状態で、これでは山の中に開けた街と何ら変わらないですね。そういう意味でもこの島のウォーターフロントの整備が急がれます。将来この島が拡大されれば、西側のコンテナヤードを移転し、水上・臨海レストラン、遊歩道などの市民の憩いの場や、全国的・世界的な規模の見本市会場を主体にしたコンベンション施設の充実に尽力していきたいですね。

浜野 高度経済成長時代に行なわれたような開発の仕方というものは、界隈性を考えず、例えば、大きなビルを建てても、所有者が階下のいい場所を占有し、上の階にはテナントが入らず、大きなビルであればあるほど寂寥感を覚えてしまうといったケースが数多く見られています。

人の集まる界隈としてのウォーターフロントでないと意味をなさない。船があって商店があり、それを結ぶストリートに商業がはりついているといった…。あくまでも経営していくものであって、飾り物では、本当の賑わいは出てきません。

梅澤 ともすると、繊細で小規模な作業となるウォータ

ーフロントの開発なんですが、その開発によって、途方もない量のお客さんを引きつけることにもなるわけです。

できるだけ大きな目標を持つことが大切

吉野　東急ハンズでは、神戸店を昭和63年オープンの予定で、現在着々と準備しています。

神戸は独特な雰囲気のある大変いい町ですので、その神戸に出店できることは、大変光栄でもあるのですが、町の持つ雰囲気だけに頼ることは出来ません。80年代は自分化の時代ということで、自分の欲しい物がディテールに至るまで見えてきた時代ですから、我々がその欲求に応えるだけの商品の豊富さというのが必要なんです。

神戸もこれからは、いろんな意味での開発が盛んに行われていくべきでしょう。その開発はといえば、やはり海なのです。この海の明るさ、静けさ、そして海面のレベルまで人が降りることが出来るというのは、神戸ならではのものです。この特徴を生かした開発をして欲しい。それと、いくら立派な容れ物があっても、その中に入る物がないと意味をなさないので、ある程度具体的なディテールが決定したところから開発を始めるべきだと思います。

梅澤　今まで神戸市は、株式会社神戸市ということで、迫力満点にやって来ましたが、これからの時代、もっと繊細な何かが求められています。都市において、ダイナミックさと繊細さとのバランスは重要です。

新しい時代の価値を提供していく、新しいタイプのディベロッパーと、それに感応してくれるお客サイドとの間で、キャッチボールをしながらより具体的な形で、ウオーターフロントの再開発を実現していって欲しいですね。

ディッチ　神戸の港は、世界でも類を見ない立派なものです。そして、ポートアイランドも素晴しい人工島です。ところが、島の住民、訪れる人々にとって十分な、水際に対してのアクセスがないというのは問題です。

表面的にしか知らない都市に関して具体的な提言をしていくのは、大変難しいことですので、計画を立てる際の心掛けについて少しお話したいと思います。

何事においても、将来の計画を立てる場合、より理想的で大きな目標を持つことが大切です。我々のボスは、「全ての目標を達成できたとすれば、それはあまりにも控え目な目標である。」と言いました。何をするにしてもその過程により、妥協せざる得ない場合があります。経済的な問題、時間的制約、物理的・地理的な問題、政治的な問題…などいろいろと達成しなければならない要因があるからです。

政治的、地理学的な観点から見ると、神戸の位置というのは世界の中心としての条件が揃っています。将来の潜在能力というものから判断しても、できるだけ大きな夢を描いた方がいいと思います。

計画は、ある一時点において完全に終わってしまうという代物ではありません。事業の最中に絶えず変わっていきます。毎年、毎世代いろいろと新しい声を盛り込んでいくこと。全員が同意したから、それで計画が終わりと考えてはいけません。かえって最終的には、全員が同意するような計画に到達しない方が賢明です。民間、行政、地元住民の間に絶えず緊張関係があることが必要であり、そしてその緊張が継続することにより、実りある成果を生み出すことができるのです。

梅澤　神戸ももっと地球的視野で将来を見据えていくべきでしょう。目標設定において器用になりすぎて、こぢんまりしたものになりがちです。もっと大胆さが必要。

計画論というものが、これからの激動の時代では変わっていかなければなりません。マスタープランを立て、それをジワリと推行していくようでは対応していくのは難しい。ダイナミックに対応できる計画と、それを動かしていける官民の協力体制が、これからのクリエーティブな関係として大切です。

鬼塚　我々はどうしても、物事を短絡的に見ようとして

しまいます。それがすぐに、形の上で表われないとそのような気にならない。神戸の再開発は、もう少し先を見ながらやっていかないといけませんね。

具体的な話に戻すと、ポートアイランド・六甲アイランド・メリケンパーク・ハーバーランドといった新しく海上にできた地帯をつなぐアクセス、例えば遊覧船がそれぞれの地帯を往復するといった、そんな実用プラス楽しめるものがどんどん欲しいですね。

新しい局面を開拓することによって、水に親しむユニークな街に生まれ変わるのではないでしょうか。

浜野　パリで有名なカフェテラス。あれは往来まではみ出して商売をやっているわけなんですが、道行く人は楽しいし、お茶を飲んでいるお客さんも街を歩く美女を観賞できるし、そのお店は儲る、役所も税金が入るし、みんなが許しあうことで、プライベートとパブリックを一緒にした、コモンスペースをつくり出しています。

大阪の御堂筋などは、プライベートとパブリックが分断した典型的な街で、警備員を配し、一般の人間の立入りを禁止したビルが建ち並ぶかと思えば、緑のある公園が申し訳程度に点在するといった、何かすごくアンバランスな感じが拭えません。

オフィス・商店・住居・公共のスペース…全てがうまくミックスされ、相乗効果を生むような、誰もが楽しめる開発にこそ意味があります。

また、東京の新宿西口のような、立体交差した街は、建物の間が連続していないために、どうしても商業が成り立ちにくいですね。やはり、平面交差で、赤信号ごとに立ち止まってウィンドウショッピングができるような、車が都合いい街ではなく、人にとって生活しやすい街でないといけません。

都市工学の論理ではなく、商業の論理、遊びの哲学でウォーターフロントの再開発を推し進めていくべきです。

日本全国、道路も整備され、建物も充実してきた現在、今後いかにリモデリングしていくか。ウォーターフロントという、近代のとげとげしい、厳しい水際線を、脱近代の新しいノウハウ、方法を結集させた智恵でもって、どのように楽しい場として再生させるかが、我々の試練であり、また別の意味で、おもしろい時代の到来と言えるでしょう。

人は水に対して限りない郷愁がある

吉野　ウォーターフロントを開発していく場合、そこには人が集まらなくてはいけません。そしてその人たちはどういう人で、どんな欲求をしているのか、もう少し掘り下げたところから始めなくては…。

人が海に出かけて行くときにはシーン（情景）が重要になります。機能じゃなく情景です。モダニズムな情景を人は求めているのか、それとも、元来あるものを大切に、現代に置き直した、ややノスタルジックな情景が重要なのか…。いろんなバリエーションがあって、そのうちのどのバリエーションを重視すればいいかということが、これからの再開発をする上でも、我々商業者にとっても大切なことです。

ディッチ　50年前、一人の偉大な人がいて、開発事業というものを、それを利用する人、活用する人の観点から考えてみたのです。それが、ラウス社の背景であるわけです。投資家、ビルダー、建設業、不動産業のためではなくて、あくまでもユーザー志向の会社なのです。人のための都市、より良く機能する都市を造る必要性が感じられたので、我社が設立されたのです。

我々が開発事業のため、新しい土地へ訪れる度に「前の土地のようにはいかない」と言われました。あまりにも、自分達のやり方に慣れ親しんできた人達にとってはそれを根本的に変えてしまうことは難しいことです。しかしながら、根本的に変えることは出来なくても、ある程度の手を加えることにより、完全に放置され、解体寸前な所を、再活性化することはできるのです。どんな町でも、新しく甦えることができるという潜在可能性を秘

めているわけです。

環境が我々を支配することがあってはいけません。我々が環境を掌中に治めても、それが人々のためになっていないのなら、人々は環境を変えなくてはならないのです。環境はそれ自身でもって変化するものではなく、放っておけば悪くなるだけです。即ち、何も行動しなければ良くはなり得ないのです。ですから、時には大胆で、不評を買うようなことさえもしなくてはいけません。また、一般住民に反対の声をあげられることや、政治レベルで反対にあうこともあるけれど、それを行うことには十分価値があるのです。

鬼塚　「市民のニーズに応える町に…」という言葉をよく耳にしますが、それにはそのニーズに応えるだけの経済基盤がなければなりません。先刻ディッチさんが言われたように、時には、反対されてもやらなければならないことがあるのです。そういう意味でも、神戸に空港がぜひ欲しい。県では、但馬・西播磨・神戸の3地区を結ぶコミューターを計画していますが、そのコミューターの母港として、神戸沖に空港があれば、重要な役割を果たしてくるでしょう。そして、人と物と情報の流れをつくり、神戸が世界的規模のコンベンション都市、ファッション都市になるためにも空港は必要だと思うのです。

ディッチ　空港の必要性は否めないのですが、港全部を滑走路のために埋め立ててしまうという、馬鹿げたことはして欲しくありません。また何十年か後には、その埋め立てた場所を掘り起こして海をつくるといったことになりかねません。

梅澤　変化の激しい世の中ですので、どの方向へ行けばいいかを、見つけることが大変です。可能性を検討し、いい方向、いいターゲットを打ち出していき、もし自分自身でどの方向に行っているか分からなければ、どの方向にも行かないことが賢明だと思います。ですから、最初にいかに良い目標・ターゲットを設定するかが大切になってくるのでしょう。

吉野　私は、神戸の持っている匂いというか雰囲気が好きだし、尊いものだと思うので、これはどんなことがあっても大切にして欲しいですね。今持っている素材を十分活かしきったウォーターフロント再開発をしていけば神戸はより良い町となるでしょう。

鬼塚　神戸はかつての造船・鉄鋼の町から、複合機能都市として生まれ変わってきました。しかし、あまりにもいろんなことをやっては全てが中途半端に終わってしまいます。何か核になるものをつくる。そのためにも、ウォーターフロントの再開発により、新しい神戸の魅力を引き出していければと思うのです。

浜野　北野町などは元来住宅地であり、お客を受け入れるキャパシティにも限度があります。それに、ある程度、客層も限定されているように思えます。ですから、今後の旧市街地・旧居留地での再開発では、多くの種類の人間を受け入れることができ、住民も観光客も一緒になって楽しめる、そんな賑わいのあるものをつくられたら素晴らしいですね。

ディッチ　大抵の方が、ボルチモアの港の写真を見たことがあるでしょう。ロンドンのテームズ川の写真、シドニーのオペラハウスの写真、香港の港の写真を見たことがあるでしょう。神戸でオペラハウスやロンドンブリッジを造るということではなく、神戸独自のものにより、神戸のウォーターフロントが世界中で有名になる可能性は必ずあるのです。そのためにも、神戸の持つ潜在可能性を捨ててしまわずに、あらゆる道を追究し、皆さんの財産でもあるウォーターフロントを素晴らしいものへと再開発していってもらいたいと思います。

浜野　都会で生活している我々には、水というものに対して、心の奥底では限りない郷愁があるのです。本当の水、本当の水際というものを大切に考えたウォーターフロントの再開発をすることによって、人と人とのふれあいのある、人のための新しい街づくりをしていければいいと思うのです。

田崎真珠㈱
取締役社長　田　崎　俊　作
神戸市中央区港島中町６－３－２
ＴＥＬ（078）302－3321

オールスタイル㈱
取締役社長　川　上　　勉
神戸市中央区伊藤町121
ＴＥＬ（078）321－2111

キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上２社の提供によるものです。